

# 数理統計

箱

2025 年 5 月 5 日

## 概要

数理統計の基礎を解説する。統計モデルを定義したあと、推定と仮説検定のそれぞれについて、基本的な定義や定理を述べる。

## 目次

1	統計モデル	2
1.1	統計モデル	2
1.2	十分性	2
1.3	完備性	5
1.4	指数型分布族	5
2	推定	8
2.1	不偏推定量	8
2.2	Fisher 情報量	9
2.3	最尤推定量	12
3	仮説検定	13
3.1	検定	13
3.2	一様最強力検定の存在	14
3.3	一様最強力不偏検定の存在	18

## 記号と用語

- $0 \cdot \infty = \infty \cdot 0 = 0$ ,  $a \cdot \infty = \infty \cdot a = \infty$  ( $a \in \overline{\mathbb{R}}_{\geq 0}$ ) とする。
- 集合  $\mathcal{X}$  を考えるとき, その部分集合  $\mathcal{A}$  の特性関数を,  $1_{\mathcal{A}}$  と書く。
- $T$  を集合  $\mathcal{X}$  から可測空間  $\mathcal{Y}$  への写像とすると,  $T$  を可測にする  $\mathcal{X}$  上の可測構造の中で最小のものを,  $\sigma[T]$  と書く。
- 位相空間  $\mathcal{X}$  におけるその部分集合  $\mathcal{A}$  の内部を,  $\text{int}_{\mathcal{X}}(\mathcal{A})$  と書く。

# 1 統計モデル

## 1.1 統計モデル

定義 1.1 (統計モデル) 可測空間  $\mathcal{X}$  とその上の確率測度の族  $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$  との組  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  を, **統計モデル** (statistical model) という.  $\mathcal{X}$  をこの統計モデルの**標本空間** (sample space) といい,  $\Theta$  をこの統計モデルの**パラメータ空間** (parameter space) という.

$(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  を統計モデルとするとき, 次の記号と用語を用いる.

- $\mathcal{X}$  から集合  $\mathcal{Y}$  への写像  $\phi: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{Y}$  を, **統計量** (statistic) という.
- 各  $\theta \in \Theta$  に対して, 確率空間  $(\mathcal{X}, P_\theta)$  上の確率変数としての期待値, 条件付き期待値, 分散, 共分散を, それぞれ  $E_\theta[\phi]$ ,  $E_\theta[\phi|\mathfrak{F}]$ ,  $\text{Var}_\theta[\phi]$ ,  $\text{Cov}_\theta[\phi, \psi]$  などと書く ( $\phi$  と  $\psi$  は有限次元実線型空間に値をとる可測統計量であり,  $\mathfrak{F}$  は  $\mathcal{X}$  の可測構造の部分  $\sigma$ -代数である).
- 有限次元実線型空間に値をとる可測統計量  $\phi$  が  $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ -**可積分**であるとは, 任意の  $\theta \in \Theta$  に対して,  $\phi$  が  $P_\theta$ -可積分であることをいう.
- 部分集合  $\mathcal{N} \subseteq \mathcal{X}$  が  $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ -**無視可能**であるとは, 任意の  $\theta \in \Theta$  に対して,  $\mathcal{N}$  が  $P_\theta$ -無視可能であることをいう. 「 $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ -ほとんどすべての」, 「 $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ -ほとんど確実に」などの用語も, 同様に用いる.

## 1.2 十分性

定義 1.2 (十分性)  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  を統計モデルとする.

- (1)  $\mathcal{X}$  の可測構造の部分  $\sigma$ -代数  $\mathfrak{F}$  がこの統計モデルに対して**十分** (sufficient) であるとは, 任意の可測集合  $\mathcal{A} \subseteq \mathcal{X}$  に対して,  $\mathfrak{F}$ -可測関数  $1_{\mathcal{A}, \mathfrak{F}}: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  であって, 任意の  $\theta \in \Theta$  に対して条件付き期待値  $E_\theta[1_{\mathcal{A}}|\mathfrak{F}]$  の代表元であるものがとれることをいう.
- (2)  $\mathcal{Y}$  を可測空間とし,  $T: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{Y}$  を可測統計量とする.  $T$  がこの統計モデルに対して**十分**であるとは,  $\sigma$ -代数  $\sigma[T]$  がこの統計モデルに対して十分であることをいう.

命題 1.3  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  を統計モデルとする.  $\mathcal{X}$  の可測構造の部分  $\sigma$ -代数  $\mathfrak{F}$  に対して, 次の条件は同値である.

- (a)  $\mathfrak{F}$  は統計モデル  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  に対して十分である.
- (b) 任意の有限次元実線型空間  $\mathcal{V}$  と  $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ -可積分な可測写像  $\phi: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$  に対して,  $\mathfrak{F}$ -可測写像  $1_{\mathcal{A}, \mathfrak{F}}: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$  であって, 任意の  $\theta \in \Theta$  に対して条件付き期待値  $E_\theta[\phi|\mathfrak{F}]$  の代表元であるものがとれる.

証明 (b)  $\implies$  (a) 条件 (b) が成り立つとする. このとき, 任意の可測集合  $\mathcal{A} \subseteq \mathcal{X}$  に対して, 条件付き期待値  $E_\theta[1_{\mathcal{A}}|\mathfrak{F}]$  の  $\theta \in \Theta$  によらない代表元  $1_{\mathcal{A}, \mathfrak{F}}: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}$  がとれる. 任意の  $\theta \in \Theta$  に対して, 条件付き期待値の順序保存性より,  $P_\theta$ -ほとんど確実に  $0 \leq 1_{\mathcal{A}, \mathfrak{F}} \leq 1$  である. そこで,  $1_{\mathcal{A}, \mathfrak{F}}$  の 0 以下の値は 0 に, 1 以上の値は 1 に修正して得られる関数を改めて  $1_{\mathcal{A}, \mathfrak{F}}$  と書くと, これも条件付き期待値  $E_\theta[1_{\mathcal{A}}|\mathfrak{F}]$  の  $\theta \in \Theta$  によらない代表元である. よって,  $\mathfrak{F}$  は統計モデル  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  に対して十分である.

(a)  $\implies$  (b)  $\mathfrak{F}$  が統計モデル  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  に対して十分であるとする. 任意の有限次元実線型空間  $\mathcal{V}$  と

$(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ -可積分な可測写像  $\phi: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$  に対して、条件付き期待値  $E_\theta[\phi|\mathfrak{F}]$  の  $\theta \in \Theta$  によらない代表元がとれることを示したい。  $\mathcal{V}$  の基底を一つ固定して成分ごとに考えることにより、一般性を失わず、  $\mathcal{V} = \mathbb{R}$  であると仮定する。さらに、正の部分と負の部分への分解を考えることにより、一般性を失わず、  $\phi \geq 0$  であると仮定する。

$\mathcal{X}$  上の可測単関数の増加列  $(\phi_n)_{n \in \mathbb{N}}$  であって、  $\phi$  に各点収束するものをとる。  $\mathfrak{F}$  の十分性より、各  $n \in \mathbb{N}$  に対して、条件付き期待値  $E_\theta[\phi_n|\mathfrak{F}]$  の  $\theta \in \Theta$  によらない代表元  $\phi_{n,\mathfrak{F}}: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$  がとれる。条件付き期待値に対する Lebesgue の収束定理より、任意の  $\theta \in \Theta$  に対して、  $(E_\theta[\phi_n|\mathfrak{F}])_{n \in \mathbb{N}}$  は  $E_\theta[\phi|\mathfrak{F}]$  に  $P_\theta$ -概収束する。そこで、関数  $\phi_{\mathfrak{F}}: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$  を

$$\phi_{\mathfrak{F}}(x) = \begin{cases} \limsup_{n \rightarrow \infty} \phi_{n,\mathfrak{F}}(x) & (\limsup_{n \rightarrow \infty} \phi_{n,\mathfrak{F}}(x) < \infty) \\ 0 & (\limsup_{n \rightarrow \infty} \phi_{n,\mathfrak{F}}(x) = \infty) \end{cases}$$

と定めると、これは  $E_\theta[\phi|\mathfrak{F}]$  の  $\theta \in \Theta$  によらない代表元である。これで、主張が示された。  $\square$

$\mathfrak{F}$  が統計モデル  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  に対して十分であるとき、  $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ -可積分な可測写像  $\phi: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$  ( $\mathcal{V}$  は有限次元実線型空間) に対して、条件付き期待値  $E_\theta[\phi|\mathfrak{F}]$  の  $\theta \in \Theta$  によらない代表元を、単に  $E[\phi|\mathfrak{F}]$  と書く。これは、  $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ -ほとんど確実に一意に定まる。

**補題 1.4**  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  を統計モデルとする。  $\mu$  を  $\mathcal{X}$  上の  $\sigma$ -有限測度とし、各  $P_\theta$  は  $\mu$ -絶対連続であるとする。このとき、パラメータの列  $(\theta_n)_{n \in \mathbb{N}_{>0}}$  を適当に選んで  $Q = \sum_{n=1}^{\infty} 2^{-n} P_{\theta_n}$  と置けば、各  $P_\theta$  は  $Q$ -絶対連続となる。

**証明**  $\mu(\mathcal{X}) = \infty$  ならば、  $\mathcal{X}$  の分割  $(\mathcal{X}_i)_{i \in \mathbb{N}_{>0}}$  であって任意の  $i \in \mathbb{N}_{>0}$  に対して  $0 < \mu(\mathcal{X}_i) < \infty$  を満たすものを取り、可測集合  $\mathcal{A} \subseteq \mathcal{X}$  に対して

$$\mu'(\mathcal{A}) = \sum_{i=1}^{\infty} 2^{-i} \mu(\mathcal{X}_i)^{-1} \mu(\mathcal{A} \cap \mathcal{X}_i)$$

と定めることにより、  $\mu$  と同値な有限測度  $\mu'$  が得られる。そこで、一般性を失わず、  $\mu$  は有限であると仮定する。

各  $\theta \in \Theta$  に対して、Radon–Nikodym 微分  $dP_\theta/d\mu$  の代表元  $f_\theta$  を一つ固定し、  $S_\theta = \{x \in \mathcal{X} \mid f_\theta(x) > 0\}$  と置く。  $\mu$  は有限だから、パラメータの列  $(\theta_n)_{n \in \mathbb{N}_{>0}}$  を、

$$\mu\left(\bigcup_{n=1}^{\infty} S_{\theta_n}\right) = \sup\left\{\mu\left(\bigcup_{\theta \in \Theta'} S_\theta\right) \mid \Theta' \text{ は } \Theta \text{ の可算部分集合}\right\}$$

を満たすようにとれる。  $Q = \sum_{n=1}^{\infty} 2^{-n} P_{\theta_n}$  と置き、各  $P_\theta$  が  $Q$ -絶対連続であることを示す。可測集合  $\mathcal{A} \subseteq \mathcal{X}$  であって  $Q(\mathcal{A}) = 0$  を満たすものを任意にとる。  $Q$  の定義より、任意の  $n \in \mathbb{N}_{>0}$  に対して、  $P_{\theta_n}(\mathcal{A}) = 0$  だから、  $\mu(\mathcal{A} \cap S_{\theta_n}) = 0$  である。また、  $(\theta_n)_{n \in \mathbb{N}_{>0}}$  のとり方より、  $\mu(S_\theta \setminus \bigcup_{n=1}^{\infty} S_{\theta_n}) = 0$  である。したがって、

$$\mu(\mathcal{A} \cap S_\theta) \leq \sum_{n=1}^{\infty} \mu(\mathcal{A} \cap S_{\theta_n}) + \mu\left(S_\theta \setminus \bigcup_{n=1}^{\infty} S_{\theta_n}\right) = 0$$

だから、  $P_\theta(\mathcal{A}) = 0$  である。よって、  $P_\theta$  は  $Q$ -絶対連続である。  $\square$

**定理 1.5 (因子分解定理)**  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  を統計モデルとする。  $\mu$  を  $\mathcal{X}$  上の  $\sigma$ -有限測度とし、各  $P_\theta$  は  $\mu$ -絶対連続であるとする。このとき、  $\mathcal{X}$  の可測構造の部分  $\sigma$ -代数  $\mathfrak{F}$  に対して、次の条件は同値である。

- (a)  $\mathfrak{F}$  は統計モデル  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  に対して十分である。  
(b) 可測関数  $g: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$  と  $\mathfrak{F}$ -可測関数の族  $(h_\theta: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0})_{\theta \in \Theta}$  が存在して、任意の  $\theta \in \Theta$  に対して、 $\mu$ -ほとんどいたるところで  $dP_\theta/d\mu = gh_\theta$  が成り立つ。

証明 補題 1.4 より、パラメータの列  $(\theta_n)_{n \in \mathbb{N}_{>0}}$  を適当に選んで  $Q = \sum_{n=1}^{\infty} 2^{-n} P_{\theta_n}$  と置けば、各  $P_\theta$  は  $Q$ -絶対連続となる。以下、条件 (a) と (b) が、ともに次の条件 (c) と同値であることを示す。

(c) 任意の  $\theta \in \Theta$  に対して、Radon–Nikodym 微分  $dP_\theta/dQ$  の代表元として、 $\mathfrak{F}$ -可測であるものがとれる。

(a)  $\implies$  (c)  $\mathfrak{F}$  が統計モデル  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  に対して十分であるとする。可測集合  $A \subseteq \mathcal{X}$  に対して、条件付き期待値  $E_\theta[1_A|\mathfrak{F}]$  の  $\theta \in \Theta$  によらない代表元  $1_{A,\mathfrak{F}}: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  をとる。 $B \in \mathfrak{F}$  とすると、任意の  $\theta \in \Theta$  に対して

$$\int_B 1_{A,\mathfrak{F}} dP_\theta = \int_B 1_A dP_\theta$$

だから、上式で  $\theta = \theta_n$  として両辺に  $2^{-n}$  を掛けたものの  $n \in \mathbb{N}_{>0}$  にわたる和をとれば、

$$\int_B 1_{A,\mathfrak{F}} dQ = \int_B 1_A dQ$$

を得る。したがって、 $1_{A,\mathfrak{F}}$  は確率測度  $Q$  に関する条件付き期待値  $E_Q[1_A|\mathfrak{F}]$  の代表元でもある。

$\theta \in \Theta$  とし、可測空間  $(\mathcal{X}, \mathfrak{F})$  上の確率測度  $P_\theta|_{\mathfrak{F}}$  と  $Q|_{\mathfrak{F}}$  を考える。 $P_\theta$  が  $Q$ -絶対連続であることより  $P_\theta|_{\mathfrak{F}}$  は  $Q|_{\mathfrak{F}}$ -絶対連続だから、Radon–Nikodym 微分  $dP_\theta|_{\mathfrak{F}}/dQ|_{\mathfrak{F}}$  が定まる。 $\mathfrak{F}$ -可測関数  $dP_\theta|_{\mathfrak{F}}/dQ|_{\mathfrak{F}}$  (の一つの代表元) が  $dP_\theta/dQ$  の代表元であることを示す。 $A \subseteq \mathcal{X}$  を可測集合とすると、 $1_{A,\mathfrak{F}}$  が条件付き期待値  $E_\theta[1_A|\mathfrak{F}]$  や  $E_Q[1_A|\mathfrak{F}]$  の代表元であることより、

$$\begin{aligned} \int_A \frac{dP_\theta|_{\mathfrak{F}}}{dQ|_{\mathfrak{F}}} dQ &= \int_{\mathcal{X}} 1_A \frac{dP_\theta|_{\mathfrak{F}}}{dQ|_{\mathfrak{F}}} dQ \\ &= \int_{\mathcal{X}} 1_{A,\mathfrak{F}} \frac{dP_\theta|_{\mathfrak{F}}}{dQ|_{\mathfrak{F}}} dQ \\ &= \int_{\mathcal{X}} 1_{A,\mathfrak{F}} dP_\theta \\ &= \int_{\mathcal{X}} 1_A dP_\theta \\ &= P_\theta(A) \end{aligned}$$

が成り立つ。よって、 $(dP_\theta|_{\mathfrak{F}}/dQ|_{\mathfrak{F}}) \cdot Q = P_\theta$  だから、 $dP_\theta|_{\mathfrak{F}}/dQ|_{\mathfrak{F}}$  は  $dP_\theta/dQ$  の代表元である。

(c)  $\implies$  (a) 条件 (c) が成り立つとして、 $dP_\theta/dQ$  を  $\mathfrak{F}$ -可測関数とみなす。 $A \subseteq \mathfrak{X}$  を可測集合とすると、任意の  $\theta \in \Theta$  と  $B \in \mathfrak{F}$  に対して

$$\int_B E_Q[1_A|\mathfrak{F}] dP_\theta = \int_B E_Q[1_A|\mathfrak{F}] \frac{dP_\theta}{dQ} dQ = \int_B 1_A \frac{dP_\theta}{dQ} dQ = \int_B 1_A dP_\theta$$

だから、 $E_Q[1_A|\mathfrak{F}]$  は条件付き期待値  $E_\theta[1_A|\mathfrak{F}]$  の  $\theta \in \Theta$  によらない代表元である。よって、 $\mathfrak{F}$  は統計モデル  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  に対して十分である。

(b)  $\implies$  (c) 条件 (b) を満たす可測関数  $g: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$  と  $\mathfrak{F}$ -可測関数の族  $(h_\theta: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0})_{\theta \in \Theta}$  がとれたとする。このとき、 $k_1 = \sum_{n=1}^{\infty} 2^{-n} gh_{\theta_n}$  は  $\mathbb{R}_{\geq 0}$  に値をとる  $\mathfrak{F}$ -可測関数であり、 $\mu$ -ほとんどいたるところで  $dQ/d\mu = gk_1$  が成り立つ。 $gk_1$  は  $\mu$ -ほとんどいたるところで有限だから、 $k_1$  の値  $\infty$  を 0 に修正して得られる  $\mathfrak{F}$ -可測関数を  $k: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$  と置くと、これも  $\mu$ -ほとんどいたるところで  $dQ/d\mu = gk$  を満たす。

各  $\theta \in \Theta$  に対して、可測関数  $\phi_\theta: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$  を、

$$\phi_\theta(x) = \begin{cases} h_\theta(x)/k(x) & (k(x) > 0) \\ 0 & (k(x) = 0) \end{cases}$$

と定める。すると、

$$\phi_\theta \cdot Q = \phi_\theta g k \cdot \mu = 1_{k>0} g h_\theta \cdot \mu = 1_{k>0} \cdot P_\theta$$

が成り立つ。さらに、 $\mu$ -ほとんどいたるところで  $dQ/d\mu = gk$  であることより  $\{k = 0\}$  は  $Q$ -無視可能だから、 $P_\theta$  が  $Q$ -絶対連続であることより  $P_\theta$ -無視可能であり、したがって、 $1_{k>0} \cdot P_\theta = P_\theta$  である。よって、 $dP_\theta/dQ$  の代表元として、 $\mathfrak{F}$ -可測関数  $\phi_\theta$  がとれる。

(c)  $\implies$  (b) 条件 (c) が成り立つとして、 $dP_\theta/dQ$  を  $\mathfrak{F}$ -可測関数とみなす。任意の  $\theta \in \Theta$  に対して、 $P_\theta = (dQ/d\mu)(dP_\theta/dQ) \cdot \mu$  だから、 $g = dQ/d\mu$ ,  $h_\theta = dP_\theta/dQ$  と置けばよい。  $\square$

**系 1.6**  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  を統計モデルとする。  $\mu$  を  $\mathcal{X}$  上の  $\sigma$ -有限測度とし、各  $P_\theta$  は  $\mu$ -絶対連続であるとする。このとき、可測空間  $\mathcal{Y}$  と可測統計量  $T: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{Y}$  に対して、次の条件は同値である。

- (a)  $T$  は統計モデル  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  に対して十分である。
- (b) 可測関数  $g: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$  と可測関数の族  $(h_\theta: \mathcal{Y} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0})_{\theta \in \Theta}$  が存在して、任意の  $\theta \in \Theta$  に対して、 $\mu$ -ほとんどすべての  $x \in \mathcal{X}$  に対して  $(dP_\theta/d\mu)(x) = g(x)h_\theta(T(x))$  が成り立つ。

**証明** 因子分解定理 (定理 1.5) と Doob–Dynkin の補題から従う。  $\square$

### 1.3 完備性

**定義 1.7 (完備性)**  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  を統計モデルとする。

- (1)  $\mathcal{X}$  の可測構造の部分  $\sigma$ -代数  $\mathfrak{F}$  がこの統計モデルに対して**完備** (complete) であるとは、任意の  $\mathfrak{F}$ -可測統計量  $\phi: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}$  に対して、

$$\text{任意の } \theta \in \Theta \text{ に対して } \phi \text{ が } P_\theta\text{-可積分かつ } E_\theta[\phi] = 0 \implies (P_\theta)_{\theta \in \Theta}\text{-ほとんど確実に } \phi = 0$$

が成り立つことをいう。

- (2)  $\mathcal{Y}$  を可測空間とし、 $T: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{Y}$  を可測統計量とする。  $T$  がこの統計モデルに対して**完備**であるとは、 $\sigma$ -代数  $\sigma[T]$  がこの統計モデルに対して完備であることをいう。

### 1.4 指数型分布族

**定義 1.8 (指数型分布族)**  $\mathcal{X}$  を可測空間とする。  $\mathcal{X}$  上の測度  $\mu$ , 可測写像  $g: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$  と  $T: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$  ( $\mathcal{V}$  は有限次元実線型空間), 写像  $a: \Theta \rightarrow \mathcal{V}^*$  と  $b: \Theta \rightarrow \mathbb{R}$  ( $\Theta$  は集合) を用いて

$$P_\theta = f_\theta \cdot \mu, \quad f_\theta(x) = g(x) \exp(\langle a(\theta), T(x) \rangle - b(\theta))$$

と表せる確率測度の族  $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$  を、 $\mathcal{X}$  上の**指数型分布族** (exponential family) という。さらに、 $\Theta$  が  $\mathcal{V}^*$  の部分集合で  $a: \Theta \rightarrow \mathcal{V}^*$  が包含写像である場合には、 $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$  を、 $\mathcal{X}$  上の**自然パラメータの指数型分布族** (exponential family with natural parameters) という。

定義 1.8 の状況で、 $\mathcal{V} = \mathbb{R}^d$  である場合には、しばしば  $\mathbb{R}^d$  上の標準内積が定める線型同型写像によって  $(\mathbb{R}^d)^*$  を  $\mathbb{R}^d$  と同一視する。

注意 1.9 定義 1.8 の状況を考える。

- (1) 任意の  $\theta \in \Theta$  に対して、 $P_\theta$  が  $\mathcal{X}$  上の確率測度であることより、 $\mathcal{X}$  上の関数  $x \mapsto h(x) \exp(\langle a(\theta), T(x) \rangle)$  は  $\mu$ -可積分であり、

$$b(\theta) = \log \left( \int_{\mathcal{X}} g(x) \exp(\langle a(\theta), T(x) \rangle) d\mu(x) \right)$$

が成り立つ。

- (2)  $g \cdot \mu$  を改めて  $\mu$  と置くことで、 $g$  は定数関数 1 であると仮定できる。

命題 1.10  $\mathcal{X}$  を可測空間とする。  $\mathcal{V}$  を有限次元実線型空間、  $\Theta$  を  $\mathcal{V}^*$  の開集合とし、  $\mathcal{X}$  上の測度  $\mu$ 、可測写像  $g: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$  と  $T: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$ 、関数  $b: \Theta \rightarrow \mathbb{R}$  を用いて

$$P_\theta = f_\theta \cdot \mu, \quad f_\theta(x) = g(x) \exp(\langle \theta, T(x) \rangle - b(\theta))$$

と表せる自然パラメータの指数型分布族  $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$  を考える。  $\mathcal{W}$  を有限次元実線型空間とし、  $\phi: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{W}$  を  $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ -可積分な可測統計量とする。

- (1) 任意の多項式関数  $p: \mathcal{V} \rightarrow \mathbb{R}$  に対して、  $\phi \cdot p(T)$  は  $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ -可積分である。  
(2)  $\Theta$  上の関数  $b$  と  $\theta \mapsto E_\theta[\phi]$  は無限階微分可能であり、任意の  $k \in \mathbb{N}$ ,  $\alpha_1, \dots, \alpha_k \in \mathcal{V}^*$ ,  $\theta \in \Theta$  に対して、

$$D_\theta^k(e^{b(\theta)} E_\theta[\phi])(\alpha_1, \dots, \alpha_k) = e^{b(\theta)} E_\theta[\phi \cdot \alpha_1 \cdots \alpha_k(T)]$$

が成り立つ（上式の右辺における  $\alpha_1 \cdots \alpha_k$  は、  $\mathcal{V}$  上の多項式関数  $v \mapsto \alpha_1(v) \cdots \alpha_k(v)$  を表す。 (1) より、上式の右辺における期待値が定義される）。特に、任意の  $\alpha \in \mathcal{V}^*$  と  $\theta \in \Theta$  に対して、

$$D_\theta(E_\theta[\phi])(\alpha) = E_\theta[\phi \cdot \alpha(T)] - E_\theta[\phi] E_\theta[\alpha(T)]$$

が成り立つ。

証明 一般性を失わず、  $g$  は定数関数 1 であると仮定する（注意 1.9 (2)）。 また、一般性を失わず、  $\mathcal{V} = \mathbb{R}^d$  であると仮定し、  $\mathbb{R}^d$  上の標準内積が定める線型同型写像によって  $(\mathbb{R}^d)^*$  を  $\mathbb{R}^d$  と同一視する。

- (1)  $\theta = (\theta_1, \dots, \theta_d) \in \Theta$  として、  $\epsilon > 0$  を  $\prod_{i=1}^d [\theta_i - \epsilon, \theta_i + \epsilon] \subseteq \Theta$  を満たすようにとる。  $p: \mathcal{V} \rightarrow \mathbb{R}$  は多項式関数だから、適当な定数  $C \in \mathbb{R}_{\geq 0}$  をとれば、任意の  $v \in \mathcal{V}$  に対して

$$|p(v)| \leq C \max_{s \in \{\pm 1\}^d} \exp(\langle s\epsilon, v \rangle)$$

となる。したがって、

$$\begin{aligned} \int_{\mathcal{X}} |\phi(x) p(T(x))| dP_\theta(x) &= \int_{\mathcal{X}} |\phi(x) p(T(x))| \exp(\langle \theta, T(x) \rangle - b(\theta)) d\mu(x) \\ &\leq C e^{-b(\theta)} \int_{\mathcal{X}} |\phi(x)| \left( \max_{s \in \{\pm 1\}^d} \exp(\langle s\epsilon, T(x) \rangle) \right) d\mu(x) \end{aligned}$$

であり、任意の  $s \in \{\pm 1\}^d$  に対して  $\phi$  が  $P_{\theta+s\epsilon}$ -可積分であることから、この式の最も左辺は有限である。よって、  $\phi \cdot p(T)$  は  $P_\theta$ -可積分である。

(2) 前半の主張を示す. 任意の  $\theta \in \Theta$  に対して

$$e^{b(\theta)} E_\theta[\phi] = \int_{\mathcal{X}} \phi(x) \exp(\langle \theta, T(x) \rangle) d\mu(x)$$

であり, 任意の  $k \in \mathbb{N}$ ,  $\alpha_1, \dots, \alpha_k \in \mathbb{R}^d$ ,  $\theta \in \Theta$  に対して

$$D_\theta^k(\exp(\langle \theta, T(x) \rangle))(\alpha_1, \dots, \alpha_k) = \alpha_1 \cdots \alpha_k(T(x)) \exp(\langle \theta, T(x) \rangle) \quad (x \in \mathcal{X})$$

である. よって, (1) と積分記号下の微分に関する定理より,  $\Theta$  上の関数  $\theta \mapsto e^{b(\theta)} E_\theta[\phi]$  は無限階微分可能であり, 任意の  $k \in \mathbb{N}$ ,  $\alpha_1, \dots, \alpha_k \in \mathbb{R}^d$ ,  $\theta \in \Theta$  に対して

$$\begin{aligned} D_\theta^k(e^{b(\theta)} E_\theta[\phi])(\alpha_1, \dots, \alpha_k) &= \int_{\mathcal{X}} \phi(x) \alpha_1 \cdots \alpha_k(T(x)) \exp(\langle \theta, T(x) \rangle) d\mu(x) \\ &= e^{b(\theta)} E_\theta[\phi \cdot \alpha_1 \cdots \alpha_k(T)] \end{aligned}$$

が成り立つ.  $\phi$  を定数関数 1 とすれば,  $\Theta$  上の関数  $e^b$  が無限階微分可能であることがわかり, したがって,  $\Theta$  上の関数  $b$  と  $\theta \mapsto E_\theta[\phi]$  が無限階微分可能であることもわかる.

後半の主張を示す. 任意の  $\alpha \in \mathbb{R}^d$  と  $\theta \in \Theta$  に対して, 前半の主張より,

$$D_\theta(e^{b(\theta)} E_\theta[\phi])(\alpha) = e^{b(\theta)} E_\theta[\phi \cdot \alpha(T)]$$

であり, 一方で

$$\begin{aligned} D_\theta(e^{b(\theta)} E_\theta[\phi])(\alpha) &= D_\theta(e^{b(\theta)})(\alpha) E_\theta[\phi] + e^{b(\theta)} D_\theta(E_\theta[\phi])(\alpha) \\ &= e^{b(\theta)} E_\theta[\alpha(T)] E_\theta[\phi] + e^{b(\theta)} D_\theta(E_\theta[\phi])(\alpha) \end{aligned}$$

である. これらの二つの式を比較して, 主張の等式を得る. □

**定理 1.11**  $\mathcal{X}$  を可測空間とする.  $\mathcal{X}$  上の測度  $\mu$ , 可測写像  $g: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$  と  $T: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$  ( $\mathcal{V}$  は有限次元実線型空間), 写像  $a: \Theta \rightarrow \mathcal{V}^*$  と  $b: \Theta \rightarrow \mathbb{R}$  ( $\Theta$  は集合) を用いて

$$P_\theta = f_\theta \cdot \mu, \quad f_\theta(x) = g(x) \exp(\langle a(\theta), T(x) \rangle - b(\theta))$$

と表せる指数型分布族  $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$  を考える.

- (1)  $\mu$  が  $\sigma$ -有限であるとする. このとき,  $T$  は統計モデル  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  に対して十分である.
- (2)  $a(\Theta)$  が  $\mathcal{V}^*$  において内点をもつとする. このとき,  $T$  は統計モデル  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  に対して完備である.

**証明** (1) 因子分解定理 (定理 1.5) から従う.

(2) 一般性を失わず,  $g$  は定数関数 1 であると仮定する (注意 1.9 (2)).

Doob–Dynkin の補題より,  $\mathcal{X}$  から  $\mathbb{R}$  への任意の  $\sigma[T]$ -可測統計量は, 可測写像  $T: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}$  を用いて  $\phi \circ T$  と表せる. 任意の  $\theta \in \Theta$  に対して,  $\phi \circ T$  は  $P_\theta$ -可積分で  $E_\theta[\phi \circ T] = 0$  を満たすと仮定する. 任意の  $\theta \in \Theta$  に対して,

$$\begin{aligned} E_\theta[\phi \circ T] &= \int_{\mathcal{X}} \phi(T(x)) \exp(\langle a(\theta), T(x) \rangle - b(\theta)) d\mu(x) \\ &= e^{-b(\theta)} \int_{\mathcal{V}} \phi(v) \exp(\langle a(\theta), v \rangle) dT_*\mu(v) \end{aligned}$$

だから、上記の仮定は、任意の  $\alpha \in a(\Theta)$  に対して

$$\int_{\mathcal{V}} \phi(v) \exp(\langle \alpha, v \rangle) dT_*\mu(v) = 0$$

であることを意味する。さらに、 $\beta \in \mathcal{V}^*$  とすると、関数  $v \mapsto \phi(v) \exp(\langle \alpha, v \rangle)$  が  $T_*\mu$ -可積分であることからこれと絶対値が等しい関数  $v \mapsto \phi(v) \exp(\langle \alpha - i\beta, v \rangle)$  も  $T_*\mu$ -可積分であり、積分記号下の微分に関する定理を用いて確かめられるように、 $\text{int}_{\mathcal{V}^*}(a(\Theta)) + i\mathcal{V}^*$  上の関数  $\alpha - i\beta \mapsto \int_{\mathcal{V}} \phi(v) \exp(\langle \alpha - i\beta, v \rangle) dT_*\mu(v)$  は正則である。ところが、 $\beta = 0$  のときはこの積分は 0 だから、一致の定理より、任意の  $\alpha - i\beta \in \text{int}_{\mathcal{V}^*}(a(\Theta)) + i\mathcal{V}^*$  に対して

$$\int_{\mathcal{V}} \phi(v) \exp(\langle \alpha - i\beta, v \rangle) dT_*\mu(v) = 0$$

が成り立つ。 $\alpha \in \text{int}_{\mathcal{V}^*}(a(\Theta))$  を固定すると、上式の左辺を  $\beta \in \mathcal{V}^*$  の関数とみなしたものは、 $\mathcal{V}$  上の有限 Borel 測度  $\phi \exp(\langle \alpha, - \rangle) \cdot T_*\mu(v)$  の Fourier 変換である。したがって、Fourier 変換の単射性より

$$\phi \exp(\langle \alpha, - \rangle) \cdot T_*\mu(v) = 0$$

だから、 $T_*\mu$ -ほとんどいたるところで  $\phi = 0$  である。すなわち、 $\mu$ -ほとんどいたるところで  $\phi \circ T = 0$  である。特に、 $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ -ほとんど確実に  $\phi \circ T = 0$  である。以上より、 $T$  は統計モデル  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  に対して完備である。□

## 2 推定

### 2.1 不偏推定量

**定義 2.1 (不偏推定量)**  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  を統計モデルとし、 $\mathcal{V}$  を有限次元実線型空間、 $g: \Theta \rightarrow \mathcal{V}$  を写像とする。可測統計量  $\delta: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$  が  $g(\theta)$  の**不偏推定量** (unbiased estimator) であるとは、任意の  $\theta \in \Theta$  に対して、 $\delta$  が  $P_\theta$ -可積分かつ  $E_\theta[\delta] = g(\theta)$  を満たすことをいう。

**定義 2.2 (一様最小分散不偏推定量)**  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  を統計モデルとし、 $\mathcal{V}$  を有限次元実内積空間、 $g: \Theta \rightarrow \mathcal{V}$  を写像とする。 $g(\theta)$  の**一様最小分散不偏推定量** (uniformly minimum-variance unbiased estimator, UMVUE) とは、 $g(\theta)$  の不偏推定量  $\delta_0: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$  であって、 $g(\theta)$  の任意の不偏推定量  $\delta: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$  と  $\theta \in \Theta$  に対して

$$E_\theta[\|\delta_0 - g(\theta)\|^2] \leq E_\theta[\|\delta - g(\theta)\|^2]$$

を満たすものをいう。

**定理 2.3 (Rao–Blackwell の定理)**  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  を統計モデルとし、 $\mathcal{X}$  の可測構造の部分  $\sigma$ -代数  $\mathfrak{F}$  はこれに対して十分であるとする。 $\mathcal{V}$  を有限次元実線型空間、 $g: \Theta \rightarrow \mathcal{V}$  を写像とし、 $\delta: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$  を  $g(\theta)$  の不偏推定量とする。

- (1)  $E[\delta|\mathfrak{F}]$  は  $g(\theta)$  の不偏推定量である。
- (2)  $w: \Theta \times \mathcal{V} \rightarrow \overline{\mathbb{R}}_{\geq 0}$  は関数であり、任意の  $\theta \in \Theta$  に対して  $w(\theta, -)$  は凸であるとする。このとき、任意の  $\theta \in \Theta$  に対して、

$$E_\theta[w(\theta, E[\delta|\mathfrak{F}])] \leq E_\theta[w(\theta, \delta)]$$



が成り立つ。特に、 $\mathcal{V}$  が有限次元実内積空間ならば、 $g(\theta)$  の任意の不偏推定量  $\delta': \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$  と  $\theta \in \Theta$  に対して、

$$E_\theta[\|E[\delta|\mathfrak{F}] - g(\theta)\|^2] \leq E_\theta[\|\delta - g(\theta)\|^2]$$

が成り立つ。

**証明** (1) 条件付き期待値の性質より、任意の  $\theta \in \Theta$  に対して、 $E[\delta|\mathfrak{F}]$  は  $P_\theta$ -可積分であり  $E_\theta[E[\delta|\mathfrak{F}]] = E_\theta[\delta] = g(\theta)$  が成り立つ。よって、 $E[\delta|\mathfrak{F}]$  は  $g(\theta)$  の不偏推定量である。

(2) 前半の主張は、条件付き期待値に対する Jensen の不等式から従う。前半の主張において  $w(\theta, v) = \|v - g(\theta)\|^2$  とすれば、後半の主張が従う。  $\square$

**定理 2.4 (Lehmann–Scheffé の定理)**  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  を統計モデルとし、 $\mathcal{X}$  の可測構造の部分  $\sigma$ -代数  $\mathfrak{F}$  はこれに対して完備かつ十分であるとする。 $\mathcal{V}$  を有限次元実線型空間とし、 $g: \Theta \rightarrow \mathcal{V}$  を写像とする。

- (1)  $g(\theta)$  の不偏推定量が存在するとする。このとき、 $\mathfrak{F}$ -可測な  $g(\theta)$  の不偏推定量が、 $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ -ほとんど確実に一意に存在する。
- (2)  $\delta_0, \delta: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$  を  $g(\theta)$  の不偏推定量とし、 $\delta_0$  は  $\mathfrak{F}$ -可測であるとする。 $w: \Theta \times \mathcal{V} \rightarrow \overline{\mathbb{R}}_{\geq 0}$  は関数であり、任意の  $\theta \in \Theta$  に対して  $w(\theta, -)$  は凸であるとする。このとき、任意の  $\theta \in \Theta$  に対して、

$$E_\theta[w(\theta, \delta_0)] \leq E_\theta[w(\theta, \delta)]$$

が成り立つ。特に、 $\mathcal{V}$  が有限次元実内積空間ならば、 $\delta_0$  は  $g(\theta)$  の一様最小分散不偏推定量である。

**証明** (1) 存在  $\delta: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$  を  $g(\theta)$  の不偏推定量とすると、Rao–Blackwell の定理 (定理 2.3 (1)) より、 $E[\delta|\mathfrak{F}]$  は  $\mathfrak{F}$ -可測な  $g(\theta)$  の不偏推定量である。

一意性  $\delta_0, \delta'_0: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$  がともに  $\mathfrak{F}$ -可測な  $g(\theta)$  の不偏推定量であるとする。このとき、任意の  $\theta \in \Theta$  に対して  $E_\theta[\delta_0 - \delta'_0] = g(\theta) - g(\theta) = 0$  だから、 $\mathfrak{F}$  の完備性より、 $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ -ほとんど確実に  $\delta_0 - \delta'_0 = 0$  が成り立つ。

(2) Rao–Blackwell の定理 (定理 2.3 (1)) より、 $E[\delta|\mathfrak{F}]$  は  $\mathfrak{F}$ -可測な  $g(\theta)$  の不偏推定量だから、(1) の一意性より、 $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ -ほとんど確実に  $\delta_0 = E[\delta|\mathfrak{F}]$  である。よって、主張は、Rao–Blackwell の定理 (定理 2.3 (2)) から従う。  $\square$

## 2.2 Fisher 情報量

**定義 2.5 (Fisher 情報量)**  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  を統計モデルとし、パラメータ空間  $\Theta$  は有限次元実線型空間  $\mathcal{V}$  の部分集合であるとする。 $\mu$  を  $\mathcal{X}$  上の測度とし、各  $P_\theta$  は可測関数  $f_\theta: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$  を用いて  $f_\theta \cdot \mu$  と表されているとする。 $\theta_0 \in \text{int}_{\mathcal{V}}(\Theta)$  とし、次の条件が満たされるとする。

- (FI1)  $\mu$ -ほとんどすべての  $x \in \mathcal{X}$  に対して、関数  $\theta \mapsto f_\theta(x)$  は、 $\theta_0$  のある近傍において正であり、 $\theta_0$  において微分可能である (したがって、微分  $(D_\theta \log f_\theta(x))|_{\theta=\theta_0}$  が定義される)。
- (FI2)  $\mathcal{X}$  上  $\mu$ -ほとんどいたるところで定義され  $\mathcal{V}^*$  に値をとる写像  $x \mapsto (D_\theta \log f_\theta(x))|_{\theta=\theta_0}$  は、 $P_{\theta_0}$ -2 乗可積分である。

このとき、

$$I(\theta_0) = E_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0} \otimes (D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0}]$$

と定め、これを統計モデル  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  の  $\theta_0$  における **Fisher 情報量** (Fisher information) という。

定義 2.5 の状況で、Fisher 情報量  $I(\theta_0)$  は、正値対称テンソルである。すなわち、 $\mathcal{V}$  上の双線型形式  $(v, w) \mapsto \langle I(\theta_0), v \otimes w \rangle$  は対称であり、任意の  $v \in \mathcal{V}$  に対して  $\langle I(\theta_0), v \otimes v \rangle \geq 0$  である。

注意 2.6 定義 2.5 の状況を考える。パラメータ  $\theta_0$  の下での  $(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0}$  の期待値 (いま,  $(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0}$  は  $P_{\theta_0}$ -2 乗可積分であると仮定しているから、この期待値が定義される) は、

$$\begin{aligned} E_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0}] &= \int_{\mathcal{X}} (D_\theta \log f_\theta(x))|_{\theta=\theta_0} f_{\theta_0}(x) d\mu(x) \\ &= \int_{\mathcal{X}} (D_\theta f_\theta(x))|_{\theta=\theta_0} d\mu(x) \end{aligned}$$

と表せる。ここで、微分と積分の順序交換ができると仮定すると、

$$E_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0}] = \left( D_\theta \int_{\mathcal{X}} f_\theta(x) d\mu(x) \right) \Big|_{\theta=\theta_0} = (D_\theta 1)|_{\theta=\theta_0} = 0$$

となる。これが成り立つとき、Fisher 情報量は、

$$I(\theta_0) = \text{Var}_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0}]$$

とも書ける。

積分記号下の微分に関する定理より、 $\mu$ -可積分関数  $h: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$ 、 $\mu$ -無視可能な集合  $\mathcal{N} \subseteq \mathcal{X}$ 、 $\theta_0$  の近傍  $\Xi \subseteq \Theta$  が存在して次の条件を満たす場合には、前段で述べた微分と積分の順序交換を正当化できる。

- (i) 任意の  $x \in \mathcal{X} \setminus \mathcal{N}$  に対して、関数  $\theta \mapsto f_\theta(x)$  は  $\Xi$  上で微分可能である。
- (ii) 任意の  $\theta_1 \in \Xi$  に対して、 $\mu$ -ほとんどすべての  $x \in \mathcal{X} \setminus \mathcal{N}$  に対して  $\|(D_\theta f_\theta(x))|_{\theta=\theta_1}\|_{\mathcal{V}} \leq h(x)$  が成り立つ。

ここで、 $\mathcal{V}$  上のノルム  $\|\cdot\|_{\mathcal{V}}$  を一つ固定した (有限次元実線型空間上のノルムはすべて同値だから、上記の条件を成否は、このノルムのとり方には依存しない)。

$\mathcal{V}$  を (可換体上の) 有限次元線型空間、 $T \in \mathcal{V}^* \otimes \mathcal{V}^*$  を非退化対称テンソルとすると、 $T$  は線型同型写像  $\Phi: \mathcal{V} \rightarrow \mathcal{V}^*$  を定める。 $T$  を  $\Phi^{-1} \otimes \Phi^{-1}$  で移して得られる非退化対称テンソル  $T^\vee = (\Phi^{-1} \otimes \Phi^{-1})(T) \in \mathcal{V} \otimes \mathcal{V}$  を、 $T$  の**逆形式** (inverse form) という。

**定理 2.7 (Cramér–Rao の不等式)**  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  を統計モデルとし、パラメータ空間  $\Theta$  は有限次元実線型空間  $\mathcal{V}$  の部分集合であるとする。 $\mu$  を  $\mathcal{X}$  上の測度とし、各  $P_\theta$  は可測関数  $f_\theta: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$  を用いて  $f_\theta \cdot \mu$  と表されているとする。 $\mathcal{W}$  を有限次元実線型空間、 $g: \Theta \rightarrow \mathcal{W}$  を写像とし、 $\delta: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{W}$  を可測統計量とする。 $\theta_0 \in \text{int}_{\mathcal{V}}(\Theta)$  とし、次の条件が満たされるとする (条件 (FI1) と (FI2) は、定義 2.5 のものと同一である)。

- (FI1)  $\mu$ -ほとんどすべての  $x \in \mathcal{X}$  に対して、関数  $\theta \mapsto f_\theta(x)$  は、 $\theta_0$  のある近傍において正であり、 $\theta_0$  において微分可能である (したがって、微分  $(D_\theta \log f_\theta(x))|_{\theta=\theta_0} \in \mathcal{V}^*$  が定義される)。
- (FI2)  $\mathcal{X}$  上  $\mu$ -ほとんどいたるところで定義され  $\mathcal{V}^*$  に値をとる写像  $x \mapsto (D_\theta \log f_\theta(x))|_{\theta=\theta_0}$  は、 $P_{\theta_0}$ -2 乗可積分である。
- (FI3) Fisher 情報量  $I(\theta_0)$  は非退化である (したがって、逆形式  $I(\theta)^\vee \in \mathcal{V} \otimes \mathcal{V}$  が定義される)。

(FI4)  $g$  は  $\theta_0$  において微分可能であり (したがって, 微分  $Dg(\theta_0) \in \text{Hom}(\mathcal{V}, \mathcal{W})$  が定義される),  $\delta$  は  $P_{\theta_0}$ -2 乗可積分であり,

$$\begin{aligned} E_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0}] &= 0, \\ E_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0} \otimes \delta] &= Dg(\theta_0) \end{aligned}$$

が成り立つ (いま,  $(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0}$  と  $\delta$  は 2 乗可積分であると仮定しているから, 上式の左辺の期待値が定義される).

このとき,  $\mathcal{W} \otimes \mathcal{W}$  上の対称テンソルの間の不等式

$$\text{Var}_{\theta_0}[\delta] \geq (Dg(\theta_0) \otimes Dg(\theta_0))(I(\theta_0)^\vee)$$

が成り立つ.

証明  $I(\theta_0)$  が定める  $\mathcal{V}$  から  $\mathcal{V}^*$  への線型同型写像を  $\Phi: \mathcal{V} \rightarrow \mathcal{V}^*$  と書き,  $u(x) = \Phi^{-1}((D_\theta \log f_\theta(x))|_{\theta=\theta_0}) \in \mathcal{V}$  と置く.  $(D_\theta \log f_\theta(x))|_{\theta=\theta_0}$  は  $\mu$ -ほとんどすべての  $x \in \mathcal{X}$  に対して定義され  $x$  の関数として  $P_{\theta_0}$ -2 乗可積分だから,  $u(x)$  も同様である. また, 条件 (ii) より,

$$E_{\theta_0}[u] = \Phi^{-1}(E_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0}]) = 0, \quad (*)$$

$$E_{\theta_0}[u \otimes \delta] = (\Phi^{-1} \otimes \text{id}_{\mathcal{W}})(E_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0} \otimes \delta]) = (\Phi^{-1} \otimes \text{id}_{\mathcal{W}})(Dg(\theta_0)) \quad (**)$$

かつ

$$\begin{aligned} \text{Var}_{\theta_0}[u] &= (\Phi^{-1} \otimes \Phi^{-1})(\text{Var}_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0}]) \\ &= (\Phi^{-1} \otimes \Phi^{-1})(I(\theta_0)) \\ &= I(\theta_0)^\vee \end{aligned} \quad (***)$$

である.

以下,

$$\begin{aligned} \text{Var}_{\theta_0}[\delta - Dg(\theta_0) \circ u] \\ = \text{Var}_{\theta_0}[\delta] - \text{Cov}_{\theta_0}[\delta, Dg(\theta_0) \circ u] - \text{Cov}_{\theta_0}[Dg(\theta_0) \circ u, \delta] + \text{Var}_{\theta_0}[Dg(\theta_0) \circ u] \end{aligned} \quad (****)$$

の左辺の各項を計算する. まず, (\*\*\*) より,

$$\begin{aligned} \text{Var}_{\theta_0}[Dg(\theta_0) \circ u] &= (Dg(\theta_0) \otimes Dg(\theta_0))(\text{Var}_{\theta_0}[u]) \\ &= (Dg(\theta_0) \otimes Dg(\theta_0))(I(\theta_0)^\vee) \end{aligned}$$

である. 次に, (\*) と (\*\*) より,

$$\begin{aligned} \text{Cov}_{\theta_0}[Dg(\theta_0) \circ u, \delta] &= (Dg(\theta_0) \otimes \text{id}_{\mathcal{W}})(\text{Cov}_{\theta_0}[u, \delta]) \\ &= (Dg(\theta_0) \otimes \text{id}_{\mathcal{W}})(E_{\theta_0}[(u - E_{\theta_0}[u]) \otimes (\delta - E_{\theta_0}[\delta])]) \\ &= (Dg(\theta_0) \otimes \text{id}_{\mathcal{W}})(E_{\theta_0}[u \otimes \delta]) \\ &= (Dg(\theta_0)\Phi^{-1} \otimes \text{id}_{\mathcal{W}})(Dg(\theta_0)) \\ &= (Dg(\theta_0) \otimes Dg(\theta_0))(I(\theta_0)^\vee) \end{aligned}$$

である（最後の等号は、両辺とも  $I(\theta_0)^\vee \in \mathcal{V} \otimes \mathcal{V}$  と二つの  $Dg(\theta_0) \in \mathcal{V}^* \otimes \mathcal{W}$  の縮約であることから成り立つ）。これらを (\*\*\* ) に代入すると

$$\begin{aligned} & \text{Var}_{\theta_0}[\delta - Dg(\theta_0) \circ u] \\ &= \text{Var}_{\theta_0}[\delta] - (Dg(\theta_0) \otimes Dg(\theta_0))(I(\theta_0)^\vee) - (Dg(\theta_0) \otimes Dg(\theta_0))(I(\theta_0)^\vee) + (Dg(\theta_0) \otimes Dg(\theta_0))(I(\theta_0)^\vee) \\ &= \text{Var}_{\theta_0}[\delta] - (Dg(\theta_0) \otimes Dg(\theta_0))(I(\theta_0)^\vee) \end{aligned}$$

となり、 $\text{Var}_{\theta_0}[\delta - Dg(\theta_0) \circ u] \geq 0$  であることと合わせて、主張の不等式を得る。  $\square$

**注意 2.8** 定理 2.7 の状況で、条件 (FI1) と (FI2) が成り立ち、さらに、 $\mu$ -可積分関数  $h: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$ 、 $\mu$ -無視可能な集合  $\mathcal{N} \subseteq \mathcal{X}$ 、 $\theta_0$  の近傍  $\Xi \subseteq \Theta$  が存在して次の条件を満たすとする。

- (i) 任意の  $x \in \mathcal{X} \setminus \mathcal{N}$  に対して、関数  $\theta \mapsto f_\theta(x)$  は  $\Xi$  上で微分可能である。
- (ii) 任意の  $\theta_1 \in \Xi$  に対して、 $\mu$ -ほとんどすべての  $x \in \mathcal{X} \setminus \mathcal{N}$  に対して  $\|(D_\theta f_\theta(x))|_{\theta=\theta_1}\|_{\mathcal{V}}$ ,  $\|(D_\theta(f_\theta(x)\delta(x)))|_{\theta=\theta_1}\|_{\text{Hom}(\mathcal{V}, \mathcal{W})} \leq h(x)$  が成り立つ。
- (iii)  $\delta$  は  $P_{\theta_0}$ -2 乗可積分な  $g(\theta)$  の不偏推定量である。

ここで、 $\mathcal{V}$  上のノルム  $\|\cdot\|_{\mathcal{V}}$  と  $\text{Hom}(\mathcal{V}, \mathcal{W})$  上のノルム  $\|\cdot\|_{\text{Hom}(\mathcal{V}, \mathcal{W})}$  を一つずつ固定した（有限次元実線型空間上のノルムはすべて同値だから、上記の条件を成否は、これらのノルムのとり方には依存しない）。このとき、条件 (FI4) が成り立つことを示そう。

$\delta$  が  $P_{\theta_0}$ -2 乗可積分であることは条件 (iii) に含まれており、条件 (i) と (ii) より  $E_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0}] = 0$  が成り立つ（注意 2.6）。次に、 $E_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0} \otimes \delta]$  について考える。この期待値は、

$$\begin{aligned} E_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0} \otimes \delta] &= \int_{\mathcal{X}} (D_\theta \log f_\theta(x))|_{\theta=\theta_0} f_{\theta_0}(x) \otimes \delta(x) d\mu(x) \\ &= \int_{\mathcal{X}} (D_\theta f_\theta(x))|_{\theta=\theta_0} \otimes \delta(x) d\mu(x) \\ &= \int_{\mathcal{X}} (D_\theta(f_\theta(x)\delta(x)))|_{\theta=\theta_0} d\mu(x) \end{aligned} \quad (*)$$

と表せる。一方で、 $\delta$  が  $g(\theta)$  の不偏推定量であること（条件 (iii)）より

$$g(\theta) = E_\theta[\delta] = \int_{\mathcal{X}} f_\theta(x)\delta(x) d\mu(x)$$

だから、条件 (i), (ii) と積分記号下の微分に関する定理より、 $g$  は  $\theta_0$  において微分可能であり、

$$Dg(\theta_0) = \int_{\mathcal{X}} (D_\theta(f_\theta(x)\delta(x)))|_{\theta=\theta_0} d\mu(x) \quad (**)$$

が成り立つ。(\*) と (\*\*) を比較して、 $E_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0} \otimes \delta] = Dg(\theta_0)$  を得る。これで、主張が示された。

## 2.3 最尤推定量

**定義 2.9（最尤推定量）**  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  を統計モデルとする。 $\mu$  を  $\mathcal{X}$  上の測度とし、各  $P_\theta$  は可測関数  $f_\theta: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$  を用いて  $f_\theta \cdot \mu$  と表されているとする。写像  $\delta: \mathcal{X} \rightarrow \Theta$  が  $\theta$  の **最尤推定量** (maximum likelihood estimator, MLE) であるとは、任意の  $x \in \mathcal{X}$  に対して、 $\Theta$  上の関数  $\theta \mapsto f_\theta(x)$  が  $\theta = \delta(x)$  において最大値をとることをいう。

### 3 仮説検定

#### 3.1 検定

定義 3.1 (検定)  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  を統計モデルとし,  $(\Theta_0, \Theta_1)$  をパラメータ空間  $\Theta$  の分割とする.

- (1) **検定** (test) とは, 可測統計量  $\phi: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  のことをいう.
- (2) 検定  $\phi: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  に対して,  $\sup_{\theta \in \Theta_0} E_\theta[\phi]$  を, この検定の  $(\Theta_0, \Theta_1)$  に対する**大きさ** (size) という.  $\alpha \in [0, 1]$  とするとき, 大きさ  $\alpha$  以下の検定を,  $(\Theta_0, \Theta_1)$  に対する**有意水準** (significance level)  $\alpha$  の検定という.
- (3) 検定  $\phi: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  と  $\theta \in \Theta_1$  に対して,  $E_\theta[\phi]$  を, この検定の  $\theta$  における**検出力** (power) という.

定義 3.2 (一様最強検定)  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  を統計モデルとし,  $(\Theta_0, \Theta_1)$  をパラメータ空間  $\Theta$  の分割とする.  $\alpha \in [0, 1]$  とするとき,  $(\Theta_0, \Theta_1)$  に対する有意水準  $\alpha$  の**一様最強検定** (uniformly most powerful test, UMP test) とは,  $(\Theta_0, \Theta_1)$  に対する有意水準  $\alpha$  の検定  $\phi_0: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  であって,  $(\Theta_0, \Theta_1)$  に対する任意の有意水準  $\alpha$  の検定  $\phi: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  と  $\theta \in \Theta_1$  に対して

$$E_\theta[\phi_0] \geq E_\theta[\phi]$$

を満たすものをいう.

定義 3.3 (不偏検定)  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  を統計モデルとし,  $(\Theta_0, \Theta_1)$  をパラメータ空間  $\Theta$  の分割とする.  $\alpha \in [0, 1]$  とするとき,  $(\Theta_0, \Theta_1)$  に対する有意水準  $\alpha$  の**不偏検定** (unbiased test) とは,  $(\Theta_0, \Theta_1)$  に対する有意水準  $\alpha$  の検定  $\phi: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  であって, 任意の  $\theta \in \Theta_1$  に対して

$$E_\theta[\phi] \geq \alpha$$

を満たすものをいう.

定義 3.4 (一様最強不偏検定)  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  を統計モデルとし,  $(\Theta_0, \Theta_1)$  をパラメータ空間  $\Theta$  の分割とする.  $\alpha \in [0, 1]$  とするとき,  $(\Theta_0, \Theta_1)$  に対する有意水準  $\alpha$  の**一様最強不偏検定** (uniformly most powerful unbiased test) とは,  $(\Theta_0, \Theta_1)$  に対する有意水準  $\alpha$  の不偏検定  $\phi_0: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  であって,  $(\Theta_0, \Theta_1)$  に対する任意の有意水準  $\alpha$  の不偏検定  $\phi: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  と  $\theta \in \Theta_1$  に対して

$$E_\theta[\phi_0] \geq E_\theta[\phi]$$

を満たすものをいう.

有意水準  $\alpha$  の一様最強検定  $\phi_0: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  は, 任意の  $\theta \in \Theta_1$  に対して  $E_\theta[\phi_0] \geq E_\theta[\alpha] = \alpha$  を満たすから (定数関数  $\alpha$  が有意水準  $\alpha$  の検定であることを用いた), 有意水準  $\alpha$  の不偏検定であり, したがって, 一様最強不偏検定である.

### 3.2 一様最強検定の存在

**補題 3.5 (一般化された Neyman–Pearson の補題)**  $(\mathcal{X}, \mu)$  を測度空間とし,  $f_1, \dots, f_n, g: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}$  を  $\mu$ -可積分関数とする.  $\alpha_1, \dots, \alpha_n \in \mathbb{R}$  とし,

$$\Phi_\alpha = \left\{ \phi: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1] \mid \phi \text{ は可測, 各 } i \in \{1, \dots, n\} \text{ に対して } \int_{\mathcal{X}} \phi f_i d\mu = \alpha_i \right\},$$

$$\Phi_{\leq \alpha} = \left\{ \phi: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1] \mid \phi \text{ は可測, 各 } i \in \{1, \dots, n\} \text{ に対して } \int_{\mathcal{X}} \phi f_i d\mu \leq \alpha_i \right\}$$

と置く.

(1)  $\phi_0 \in \Phi_\alpha$  とし, ある  $c_1, \dots, c_n \in \mathbb{R}$  が存在して

$$\phi_0(x) = \begin{cases} 0 & (g(x) < \sum_{i=1}^n c_i f_i(x)) \\ 1 & (g(x) > \sum_{i=1}^n c_i f_i(x)) \end{cases} \quad (\mu\text{-a.e. } x \in \mathcal{X})$$

が満たされているとする. このとき,  $\phi \in \Phi_\alpha$  に対する値  $\int_{\mathcal{X}} \phi g d\mu$  は,  $\phi = \phi_0$  のときに最大値をとる.

(2) (1)において, さらに,  $c_1, \dots, c_n \in \mathbb{R}_{\geq 0}$  ととれるとする. このとき,  $\phi \in \Phi_{\leq \alpha}$  に対する値  $\int_{\mathcal{X}} \phi g d\mu$  は,  $\phi = \phi_0$  のときに最大値をとる.

**証明**  $\phi_0 \in \Phi_\alpha$  が (1) または (2) の条件を満たすとする. 任意の  $\phi \in \Phi_\alpha$  または  $\phi \in \Phi_{\leq \alpha}$  に対して,

$$\begin{aligned} \int_{\mathcal{X}} \phi_0 g d\mu - \sum_{i=1}^n c_i \alpha_i &= \int_{\mathcal{X}} \phi_0 \left( g - \sum_{i=1}^n c_i f_i \right) d\mu \\ &\geq \int_{\mathcal{X}} \phi \left( g - \sum_{i=1}^n c_i f_i \right) d\mu \\ &= \int_{\mathcal{X}} \phi g d\mu - \sum_{i=1}^n c_i \alpha_i \end{aligned}$$

である. ここで, 最後の不等号は, (1) の場合は  $\phi \in \Phi_\alpha$  から (より強く等号が) 成り立ち, (2) の場合は  $\phi \in \Phi_{\leq \alpha}$  と  $c_1, \dots, c_n \in \mathbb{R}_{\geq 0}$  から成り立つ. よって,

$$\int_{\mathcal{X}} \phi_0 g d\mu \geq \int_{\mathcal{X}} \phi g d\mu$$

が成り立つ. □

**定理 3.6 (Neyman–Pearson の補題)**  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  を統計モデルとし, パラメータ空間  $\Theta$  は 2 元集合  $\{\theta_0, \theta_1\}$  であるとする.  $\mu$  を  $\mathcal{X}$  上の測度とし, 各  $P_\theta$  は可測関数  $f_\theta: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$  を用いて  $f_\theta \cdot \mu$  と表されているとする.  $\alpha \in [0, 1]$  とする.

(1) 次の条件を満たす検定  $\phi: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  は,  $(\{\theta_0\}, \{\theta_1\})$  に対する有意水準  $\alpha$  の一様最強検定である.

(i)  $E_{\theta_0}[\phi] = \alpha$  である.

(ii) ある  $c \in \overline{\mathbb{R}}_{\geq 0}$  が存在して,

$$\phi(x) = \begin{cases} 0 & (f_{\theta_1}(x) < c f_{\theta_0}(x)) \\ 1 & (f_{\theta_1}(x) > c f_{\theta_0}(x)) \end{cases} \quad (\mu\text{-a.e. } x \in \mathcal{X})$$

が成り立つ.

(2) (1) の条件を満たす検定  $\phi$  は, 必ず存在する.

**証明** (1)  $c < \infty$  ならば, 主張は, 一般化された Neyman–Pearson の補題 (補題 3.5 (2)) で  $n = 1$  とすれば従う.  $c = \infty$  であるとして,  $\phi$  を主張の条件を満たす検定とする. 条件 (ii) は

$$\phi(x) = \begin{cases} 0 & (f_{\theta_0}(x) > 0) \\ 1 & (f_{\theta_0}(x) = 0 \text{ かつ } f_{\theta_1}(x) > 0) \end{cases} \quad (\mu\text{-a.e. } x \in \mathcal{X})$$

となり, このことと条件 (i) より,  $\alpha = E_{\theta_0}[\phi] = 0$  となる.  $(\{\theta_0\}, \{\theta_1\})$  に対する有意水準 0 の検定とは,  $P_{\theta_0}$ -ほとんど確実に (すなわち,  $\{f_{\theta_0} \neq 0\}$  上  $\mu$ -ほとんどいたるところ) で値 0 をとる検定にほかならず,  $\phi$  がその中で一様最強力であることは, 明らかである.

(2) 関数  $F: \mathbb{R}_{\geq 0} \rightarrow [0, 1]$  を

$$F(c) = P_{\theta_0}(\{f_{\theta_1} \leq cf_{\theta_0}\})$$

と定めると,  $F$  は増加かつ右連続で,  $\lim_{c \rightarrow \infty} F(c) = 1$  を満たす. したがって,  $c \in \overline{\mathbb{R}}_{\geq 0}$  を  $F(c-) \leq 1 - \alpha \leq F(c)$  を満たすようにとれ, これに対して,  $\gamma \in [0, 1]$  を  $F(c-) + \gamma(F(c) - F(c-)) = 1 - \alpha$  を満たすようにとれる ( $F(0-) = 0$ ,  $F(\infty) = F(\infty-) = 1$  とみなす). これらを用いて, 検定  $\phi: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  を

$$\phi(x) = \begin{cases} 0 & (f_{\theta_1}(x) < cf_{\theta_0}(x)) \\ \gamma & (f_{\theta_1}(x) = cf_{\theta_0}(x)) \\ 1 & (f_{\theta_1}(x) > cf_{\theta_0}(x)) \end{cases}$$

と定めれば, これは (1) の条件を満たす. □

**注意 3.7** 検定  $\phi: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  が Neyman–Pearson の補題 (定理 3.6 (1)) の条件を満たすとして, 条件 (ii) における  $c \in \overline{\mathbb{R}}_{\geq 0}$  をとる. Neyman–Pearson の補題 (定理 3.6 (1)) の証明からわかるように,  $c = \infty$  となりうるのは,  $\alpha = 0$  の場合だけである.

**命題 3.8**  $(\mathcal{X}, (P_{\theta})_{\theta \in \Theta})$  を統計モデルとし, パラメータ空間  $\Theta$  は 2 元集合  $\{\theta_0, \theta_1\}$  であるとする.  $\mu$  を  $\mathcal{X}$  上の測度とし, 各  $P_{\theta}$  は可測関数  $f_{\theta}: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$  を用いて  $f_{\theta} \cdot \mu$  と表されているとする.  $\alpha \in [0, 1]$  とし,  $\phi: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  を  $(\{\theta_0\}, \{\theta_1\})$  に対する有意水準  $\alpha$  の一様最強力検定とする. ある  $c \in \overline{\mathbb{R}}_{\geq 0}$  が存在して,

$$\phi(x) = \begin{cases} 0 & (f_{\theta_1}(x) < cf_{\theta_0}(x)) \\ 1 & (f_{\theta_1}(x) > cf_{\theta_0}(x)) \end{cases} \quad (\mu\text{-a.e. } x \in \mathcal{X})$$

が成り立つ.

**証明** Neyman–Pearson の補題 (定理 3.6 (1)) の条件を満たす検定  $\phi_0: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  をとり (定理 3.6 (2)), 条件 (ii) における  $c \in \overline{\mathbb{R}}_{\geq 0}$  をとる.  $\phi$  と  $\phi_0$  はともに  $(\{\theta_0\}, \{\theta_1\})$  に対する有意水準  $\alpha$  の一様最強力検定であり, 条件 (i) より  $E_{\theta_0}[\phi] = \alpha$  だから,

$$\int_{\mathcal{X}} (\phi_0 - \phi) f_{\theta_0} d\mu = E_{\theta_0}[\phi_0] - E_{\theta_0}[\phi] \geq 0, \quad (*)$$

$$\int_{\mathcal{X}} (\phi_0 - \phi) f_{\theta_1} d\mu = E_{\theta_1}[\phi_0] - E_{\theta_1}[\phi] = 0 \quad (**)$$

である.

$c < \infty$  であるとする。このとき、(\*) と (\*\*) より、

$$\int_{\mathcal{X}} (\phi - \phi_0)(f_{\theta_1} - cf_{\theta_0}) \leq 0$$

である。一方で、 $\phi_0$  は条件 (ii) を満たすから、 $\mu$ -ほとんどいたるところで  $(\phi - \phi_0)(f_{\theta_1} - cf_{\theta_0}) \geq 0$  である。このことと上式より、 $\mu$ -ほとんどいたるところで  $(\phi - \phi_0)(f_{\theta_1} - cf_{\theta_0}) = 0$  である。すなわち、

$$\phi(x) = \begin{cases} 0 & (f_{\theta_1}(x) < cf_{\theta_0}(x)) \\ 1 & (f_{\theta_0}(x) > cf_{\theta_0}(x)) \end{cases} \quad (\mu\text{-a.e. } x \in \mathcal{X}) \quad (***)$$

が成り立つ。

$c = \infty$  であるとする。このとき、 $\phi_0$  は  $\{f_{\theta_0} > 0\}$  上  $\mu$ -ほとんどいたるところで 0 だから、(\*) より、 $\phi$  も  $\{f_{\theta_0} > 0\}$  上  $\mu$ -ほとんどいたるところで 0 である。また、このことと (\*\*) より

$$\int_{\{f_{\theta_0}=0\}} (\phi_0 - \phi)f_{\theta_1} d\mu = 0$$

であり、 $\phi_0$  は  $\{f_{\theta_0} = 0 \text{ かつ } f_{\theta_1} > 0\}$  上  $\mu$ -ほとんどいたるところで 1 だから、 $\phi$  も  $\{f_{\theta_0} = 0 \text{ かつ } f_{\theta_1} > 0\}$  上  $\mu$ -ほとんどいたるところで 1 である。よって、 $c = \infty$  の場合にも、(\*\*\*) が成り立つ。□

**注意 3.9** 命題 3.8 の状況で、 $(\{\theta_0\}, \{\theta_1\})$  に対する有意水準  $\alpha$  の一様最強力検定  $\phi: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  が  $E_{\theta_0}[\phi] = \alpha$  を満たすとは限らない。

**定義 3.10 (単調尤度比)**  $(\mathcal{X}, (P_{\theta})_{\theta \in \Theta})$  を統計モデルとし、パラメータ空間  $\Theta$  は全順序集合であるとする。 $\mu$  を  $\mathcal{X}$  上の測度とし、各  $P_{\theta}$  は可測関数  $f_{\theta}: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$  を用いて  $f_{\theta} \cdot \mu$  と表されているとする。 $\mathcal{Y}$  を全順序集合とし、 $T: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{Y}$  を統計量とする。統計モデル  $(\mathcal{X}, (P_{\theta})_{\theta \in \Theta})$  が  $\mu$  と  $T$  に関して**単調尤度比** (monotone likelihood ratio) をもつとは、次の条件が満たされることをいう。

$\xi < \eta$  を満たす任意の  $\xi, \eta \in \Theta$  に対して、増加写像  $r_{\eta, \xi}: \mathcal{Y} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$  が存在して、 $\mathcal{X}$  上  $\mu$ -ほとんどいたるところで  $f_{\eta} = (r_{\eta, \xi} \circ T)f_{\xi}$  が成り立つ。

**注意 3.11** 定義 3.10 の状況で、単調尤度比をもつかどうかは、 $\mu$  のとり方には依存するが、 $\mu$  を固定した上での各  $f_{\theta}$  のとり方には依存しない。

**定理 3.12**  $(\mathcal{X}, (P_{\theta})_{\theta \in \Theta})$  を統計モデルとし、パラメータ空間  $\Theta$  は全順序集合であるとする。 $\mu$  を  $\mathcal{X}$  上の測度とし、各  $P_{\theta}$  は可測関数  $f_{\theta}: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$  を用いて  $f_{\theta} \cdot \mu$  と表されているとする。 $\mathcal{Y}$  を全順序集合、 $T: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{Y}$  を統計量とし、統計モデル  $(\mathcal{X}, (P_{\theta})_{\theta \in \Theta})$  は  $\mu$  と  $T$  に関して単調尤度比をもつとする。 $\theta_0 \in \Theta$  とし、 $\Theta_0 = \{\theta \in \Theta \mid \theta \leq \theta_0\}$ 、 $\Theta_1 = \{\theta \in \Theta \mid \theta > \theta_0\}$  と置く。 $\alpha \in [0, 1]$  とする。

(1) 次の条件を満たす検定  $\phi: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  は、 $(\Theta_0, \Theta_1)$  に対する有意水準  $\alpha$  の一様最強力検定である。

(i)  $E_{\theta_0}[\phi] = \alpha$  である。

(ii) ある  $t \in \mathcal{Y}$  が存在して、

$$\phi(x) = \begin{cases} 0 & (T(x) < t) \\ 1 & (T(x) > t) \end{cases} \quad (\mu\text{-a.e. } x \in \mathcal{X})$$

が成り立つ。



(2)  $T$  は  $\mathcal{Y} = [-\infty, \infty)$  に値をとる可測統計量であり、 $\alpha \in (0, 1]$  であるとする。このとき、(1) の条件を満たす検定  $\phi$  は、必ず存在する。

**証明** (1) 単調尤度比の仮定より、 $\xi < \eta$  を満たす任意の  $\xi, \eta \in \Theta$  に対して、増加写像  $r_{\eta, \xi}: \mathcal{Y} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$  が存在して、 $\mathcal{X}$  上  $\mu$ -ほとんどいたるところで  $f_\eta = (r_{\eta, \xi} \circ T)f_\xi$  が成り立つ。以下、この  $r_{\eta, \xi}$  を用いる。検定  $\phi$  が主張の条件を満たすとして、条件 (ii) における  $t \in \mathcal{Y}$  をとる。

まず、 $\xi, \eta \in \Theta$  が  $\xi < \eta$  を満たすとして、 $\phi$  が  $(\{\xi\}, \{\eta\})$  に対する有意水準  $E_\xi[\phi]$  の一様最強力検定であることを示す。 $\mu$ -ほとんどすべての  $x \in \mathcal{X}$  に対して  $f_\eta(x) = r_{\eta, \xi}(T(x))f_\xi(x)$  であり、このような  $x$  に対しては、 $f_\eta(x) < r_{\eta, \xi}(t)f_\xi(x)$  ならば  $T(x) < t$  であり、 $f_\eta(x) > r_{\eta, \xi}(t)f_\xi(x)$  ならば  $T(x) > t$  である。よって、条件 (ii) と合わせて

$$\phi(x) = \begin{cases} 0 & (f_\eta(x) < r_{\eta, \xi}(t)f_\xi(x)) \\ 1 & (f_\eta(x) > r_{\eta, \xi}(t)f_\xi(x)) \end{cases} \quad (\mu\text{-a.e. } x \in \mathcal{X})$$

を得るから、Neyman–Pearson の補題 (定理 3.6 (1)) より、 $\phi$  は  $(\{\xi\}, \{\eta\})$  に対する有意水準  $E_\xi[\phi]$  の一様最強力検定である。

次に、定理の主張を示す。 $\theta \in \Theta_0$  とすると、前段の結果より、 $\phi$  は  $(\{\theta\}, \{\theta_0\})$  に対する有意水準  $E_\theta[\phi]$  の一様最強力検定であり、特に不偏検定だから、 $E_\theta[\phi] \leq E_{\theta_0}[\phi] = \alpha$  である。また、 $\theta \in \Theta_1$  とすると、 $\phi$  は  $(\{\theta_0\}, \{\theta\})$  に対する有意水準  $E_{\theta_0}[\phi] = \alpha$  の一様最強力検定である。よって、 $\phi$  は  $(\Theta_0, \Theta_1)$  に対する有意水準  $\alpha$  の一様最強力検定である。

(2) 関数  $F: [-\infty, \infty) \rightarrow [0, 1]$  を

$$F(t) = P_{\theta_0}(\{T \leq t\})$$

と定めると、 $F$  は増加かつ右連続で、 $\lim_{t \rightarrow \infty} F(t) = 1$  を満たす。したがって、 $t \in [-\infty, \infty)$  を  $F(t-) \leq 1 - \alpha \leq F(t)$  を満たすようにとれ ( $\alpha \in (0, 1]$  であることに注意する)、これに対して、 $\gamma \in [0, 1]$  を  $F(t-) + \gamma(F(t) - F(t-)) = 1 - \alpha$  を満たすようにとれる ( $F((-\infty)-) = 0$  とみなす)。これらを用いて、検定  $\phi: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  を

$$\phi(x) = \begin{cases} 0 & (T(x) < t) \\ \gamma & (T(x) = t) \\ 1 & (T(x) > t) \end{cases}$$

と定めれば、これは (1) の条件を満たす。 □

**系 3.13**  $\mathcal{X}$  を可測空間とする。 $\Theta$  を  $\mathbb{R}$  の部分集合とし、 $\mathcal{X}$  上の測度  $\mu$ 、可測関数  $g: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$  と  $T: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}$ 、関数  $b: \Theta \rightarrow \mathbb{R}$  を用いて

$$P_\theta = f_\theta \cdot \mu, \quad f_\theta(x) = g(x) \exp(\theta T(x) - b(\theta))$$

と表せる自然パラメータの指数型分布族  $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$  を考える。 $\theta_0 \in \Theta$  とし、 $\Theta_0 = \{\theta \in \Theta \mid \theta \leq \theta_0\}$ 、 $\Theta_1 = \{\theta \in \Theta \mid \theta > \theta_0\}$  と置く。 $\alpha \in [0, 1]$  とする。

(1) 次の条件を満たす検定  $\phi: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  は、 $(\Theta_0, \Theta_1)$  に対する有意水準  $\alpha$  の一様最強力検定である。

(i)  $E_{\theta_0}[\phi] = \alpha$  である。

(ii) ある  $t \in [-\infty, \infty)$  が存在して、

$$\phi(x) = \begin{cases} 0 & (T(x) < t) \\ 1 & (T(x) > t) \end{cases} \quad (\mu\text{-a.e. } x \in \mathcal{X})$$

が成り立つ.

(2)  $\alpha \in (0, 1]$  であるとする. このとき, (1) の条件を満たす検定  $\phi$  は, 必ず存在する.

証明  $\xi < \eta$  を満たす任意の  $\xi, \eta \in \Theta$  に対して,

$$\frac{f_\eta(x)}{f_\xi(x)} = \exp((\eta - \xi)T(x) - (b(\eta) - b(\xi))) \quad (x \in \mathcal{X})$$

であり, これは  $T(x)$  の増加関数として書ける. よって, 統計モデル  $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$  は  $\mu$  と  $T$  に関して単調尤度比をもつから, 主張は定理 3.12 から従う.  $\square$

### 3.3 一様最強力不偏検定の存在

補題 3.14  $\mathcal{X}$  を可測空間とする.  $\Theta$  を  $\mathbb{R}$  の部分集合とし,  $\mathcal{X}$  上の測度  $\mu$ , 可測関数  $g: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$  と  $T: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}$ , 関数  $b: \Theta \rightarrow \mathbb{R}$  を用いて

$$P_\theta = f_\theta \cdot \mu, \quad f_\theta(x) = g(x) \exp(\theta T(x) - b(\theta))$$

と表せる自然パラメータの指数型分布族  $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$  を考える.  $\alpha \in [0, 1]$  とする.

(1)  $\theta_0 \in \text{int}_{\mathbb{R}}(\Theta)$  とする. このとき,  $T$  と  $\phi T$  は  $P_{\theta_0}$ -可積分であり,  $(\{\theta_0\}, \Theta \setminus \{\theta_0\})$  に対する有意水準  $\alpha$  の不偏検定  $\phi: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  は,

$$E_{\theta_0}[\phi] = \alpha, \quad E_{\theta_0}[\phi T] = \alpha E_{\theta_0}[T]$$

を満たす.

(2)  $\theta_0, \theta_1 \in \text{int}_{\mathbb{R}}(\Theta)$ ,  $\theta_0 < \theta_1$  とする. このとき,  $(\Theta \cap [\theta_0, \theta_1], \Theta \setminus [\theta_0, \theta_1])$  に対する有意水準  $\alpha$  の不偏検定  $\phi: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  は,

$$E_{\theta_0}[\phi] = E_{\theta_1}[\phi] = \alpha$$

を満たす.

証明 命題 1.10 (1) より, 任意の  $\theta \in \text{int}_{\mathbb{R}}(\Theta)$  に対して,  $T$  と  $\phi T$  は  $P_\theta$ -可積分である. また, 関数  $F: \Theta \rightarrow \mathbb{R}$  を  $F(\theta) = E_\theta[\phi]$  と定めると, 命題 1.10 (2) より,  $F$  は  $\text{int}_{\mathbb{R}}(\Theta)$  上で無限階微分可能であり, 任意の  $\theta \in \text{int}_{\mathbb{R}}(\Theta)$  に対して

$$F'(\theta) = E_\theta[\phi T] - E_\theta[T] E_\theta[\phi]$$

である.

(1) 仮定より,  $F(\theta_0) \leq \alpha$  であり,  $\theta \in \Theta \setminus \{\theta_0\}$  に対しては  $F(\theta) \geq \alpha$  である.  $F$  は  $\text{int}_{\mathbb{R}}(\Theta)$  上で連続だから, このことから  $F(\theta_0) = \alpha$  を得る. また,  $F$  は  $\theta_0$  において最小値をとるから,  $F'(\theta_0) = 0$  である. 上記の  $F'$  の表式と合わせて,  $E_{\theta_0}[\phi] = \alpha$  かつ  $E_{\theta_0}[\phi T] = \alpha E_{\theta_0}[T]$  を得る.

(2) 仮定より,  $\theta \in \Theta \cap [\theta_0, \theta_1]$  に対しては  $F(\theta) \leq \alpha$  であり,  $\theta \in \Theta \setminus [\theta_0, \theta_1]$  に対しては  $F(\theta) \geq \alpha$  である.  $F$  は  $\text{int}_{\mathbb{R}}(\Theta)$  上で連続だから, このことから  $F(\theta_0) = F(\theta_1) = \alpha$ , すなわち  $E_{\theta_0}[\phi] = E_{\theta_1}[\phi] = \alpha$  を得る.  $\square$

補題 3.15  $P$  を  $\mathbb{R}$  上の確率 Borel 測度とし,  $f: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$  を  $P$ -可積分な狭義増加関数とする.  $\alpha \in (0, 1]$  とする. このとき, 次の条件を満たす可測関数  $\chi: \mathbb{R} \rightarrow [0, 1]$  が存在する.

- (i)  $E[\chi] = \alpha$  かつ  $E[\chi f] = \alpha E[f]$  である.  
(ii) ある  $t_0, t_1 \in \mathbb{R}$ ,  $t_0 \leq t_1$  と  $\gamma_0, \gamma_1 \in \mathbb{R}$  が存在して,

$$\chi(t) = \begin{cases} 0 & (t_0 < t < t_1) \\ \gamma_0 & (t = t_0) \\ \gamma_1 & (t = t_1) \\ 1 & (t < t_0 \text{ または } t > t_1) \end{cases}$$

が成り立つ.

**証明** 関数  $F: \overline{\mathbb{R}} \rightarrow [0, 1]$  を

$$F(t) = P((-\infty, t])$$

と定めると,  $F$  は増加かつ右連続で,  $F(-\infty) = 0$  かつ  $F(\infty) = \lim_{t \rightarrow \infty} F(t) = 1$  を満たす. これを用いて, 各  $p \in [0, 1]$  に対して,  $t_*(p) \in \overline{\mathbb{R}}$  と  $\gamma_*(p) \in [0, 1]$  を

$$t_*(p) = \inf\{t \in \overline{\mathbb{R}} \mid F(t) \geq p\},$$

$$\gamma_*(p) = \begin{cases} (p - F(t_*(p)-)) / (F(t_*(p)) - F(t_*(p)-)) & (F(t_*(p)-) < F(t_*(p))) \\ 0 & (F(t_*(p)-) = F(t_*(p))) \end{cases}$$

と定めると ( $F((-\infty)-) = 0$  とみなす),

$$E[1_{(-\infty, t_*(p))} + \gamma_*(p)1_{\{t_*(p)\}}] = p$$

となる. そこで, 各  $p \in [0, \alpha]$  に対して, 可測関数  $\chi_p: \mathbb{R} \rightarrow [0, 1]$  を

$$\begin{aligned} \chi_p &= 1 + (1_{(-\infty, t_*(p))} + \gamma_*(p)1_{\{t_*(p)\}}) - (1_{(-\infty, t_*(p+1-\alpha))} + \gamma_*(p+1-\alpha)1_{\{t_*(p+1-\alpha)\}}) \\ &= 1_{(-\infty, t_*(p))} + \gamma_*(p)1_{\{t_*(p)\}} + (1 - \gamma_*(p+1-\alpha))1_{\{t_*(p+1-\alpha)\}} + 1_{\{t_*(p+1-\alpha), \infty\}} \end{aligned}$$

と定めると, これは  $E[\chi_p] = \alpha$  を満たし,  $p \in (0, \alpha)$  ならば  $-\infty < t_*(p) \leq t_*(p+1-\alpha) < \infty$  だから条件 (ii) を満たす. あとは,  $E[\chi_p f] = \alpha E[f]$  を満たす  $p \in (0, \alpha)$  が存在することを示せばよい.

まず,  $[0, \alpha]$  上の関数  $p \mapsto E[\chi_p f]$  が連続であることを示す. そのためには,  $[0, 1]$  上の関数  $p \mapsto E[(1_{(-\infty, t_*(p))} + \gamma_*(p)1_{\{t_*(p)\}})f]$  が連続であることを示せばよい.  $p, p' \in [0, 1]$  とすると,  $(1_{(-\infty, t_*(p))} + \gamma_*(p)1_{\{t_*(p)\}}) - (1_{(-\infty, t_*(p'))} + \gamma_*(p')1_{\{t_*(p')\}})$  は常に 0 以上または常に 0 以下であり,  $[t_*(p'), t_*(p)]$  または  $[t_*(p), t_*(p')]$  の外では 0 であり, その期待値は  $p - p'$  である. したがって,  $f$  が増加であること合わせて,

$$\begin{aligned} &|E[(1_{(-\infty, t_*(p))} + \gamma_*(p)1_{\{t_*(p)\}})f] - E[(1_{(-\infty, t_*(p'))} + \gamma_*(p')1_{\{t_*(p')\}})f]| \\ &\leq E[|(1_{(-\infty, t_*(p))} + \gamma_*(p)1_{\{t_*(p)\}}) - (1_{(-\infty, t_*(p'))} + \gamma_*(p')1_{\{t_*(p')\}})||f|] \\ &\leq E[|(1_{(-\infty, t_*(p))} + \gamma_*(p)1_{\{t_*(p)\}}) - (1_{(-\infty, t_*(p'))} + \gamma_*(p')1_{\{t_*(p')\}})|] \sup_{t \in [t_*(p'), t_*(p)] \text{ または } [t_*(p), t_*(p')]} |f(t)| \\ &= |p - p'| \max\{|f(t_*(p))|, |f(t_*(p'))|\} \end{aligned}$$

を得る. よって,  $p$  を固定して  $p' \rightarrow p$  とするとき  $E[(1_{(-\infty, t_*(p))} + \gamma_*(p)1_{\{t_*(p)\}})f] \rightarrow E[(1_{(-\infty, t_*(p'))} + \gamma_*(p')1_{\{t_*(p')\}})f]$  となる. これで, 主張が示された.

次に,  $E[\chi_p f] = \alpha E[f]$  を満たす  $p \in (0, \alpha)$  が存在することを示す.  $P$  が 1 点  $t_0 \in \mathbb{R}$  に集中した Dirac 測度である場合, 容易に確かめられるように, 任意の  $p \in (0, \alpha)$  に対して  $\chi_p = \alpha 1_{\{t_0\}}$  であり, これは  $E[\chi_p f] = \alpha E[f]$  を満たす. 以下,  $P$  が Dirac 測度ではない場合を考える.  $p = 0$  のとき,  $t_*(p) = t_*(0) = -\infty$

だから,  $\chi_0$  は  $(-\infty, t_*(1-\alpha))$  上では 0,  $(t_*(1-\alpha), \infty)$  上では 1 である. したがって,  $f$  が狭義増加であることと  $P$  が Dirac 測度ではないことより

$$(\chi_p - \alpha)(f - f(t_*(1-\alpha))) \geq 0 \quad \text{かつ} \quad P((\chi_p - \alpha)(f - f(t_*(1-\alpha))) > 0) > 0$$

だから,  $E[\chi_p] = \alpha$  と合わせて

$$E[\chi_p f] - \alpha E[f] = E[(\chi_p - \alpha)f] = E[(\chi_p - \alpha)(f - f(t_*(1-\alpha)))] > 0 \quad (*)$$

を得る. また,  $p = \alpha$  のとき,  $t_*(p+1-\alpha) = t_*(1)$  かつ  $P((t_*(1), \infty)) = 0$  だから,  $\chi_p$  は  $(-\infty, t_*(\alpha))$  上では 1,  $(t_*(\alpha), \infty)$  上では  $P$ -ほとんど確実に 0 である. したがって,  $f$  が狭義増加であることと  $P$  が Dirac 測度ではないことより

$$(\chi_p - \alpha)(f - f(t_*(\alpha))) \leq 0 \quad P\text{-a.s.} \quad \text{かつ} \quad P((\chi_p - \alpha)(f - f(t_*(\alpha))) < 0) > 0$$

だから,  $E[\chi_p] = \alpha$  と合わせて

$$E[\chi_p f] - \alpha E[f] = E[(\chi_p - \alpha)f] = E[(\chi_p - \alpha)(f - f(t_*(\alpha)))] < 0 \quad (**)$$

を得る. 前段で示したように,  $[0, \alpha]$  上の関数  $p \mapsto E[\chi_p f]$  は連続だから,  $(*)$ ,  $(**)$  と中間値の定理より,  $E[\chi_p f] = \alpha E[f]$  を満たす  $p \in (0, \alpha)$  が存在する. これで, 主張が示された.  $\square$

**定理 3.16**  $\mathcal{X}$  を可測空間とする.  $\Theta$  を  $\mathbb{R}$  の部分集合とし,  $\mathcal{X}$  上の測度  $\mu$ , 可測関数  $g: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$  と  $T: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}$ , 関数  $b: \Theta \rightarrow \mathbb{R}$  を用いて

$$P_\theta = f_\theta \cdot \mu, \quad f_\theta(x) = g(x) \exp(\theta T(x) - b(\theta))$$

と表せる自然パラメータの指数型分布族  $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$  を考える.  $\theta_0 \in \text{int}_{\mathbb{R}}(\Theta)$  とし,  $\alpha \in [0, 1]$  とする.

(1) 次の条件を満たす検定  $\phi: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  は,  $(\{\theta_0\}, \Theta \setminus \{\theta_0\})$  に対する有意水準  $\alpha$  の一様最強力不偏検定である.

(i)  $E_{\theta_0}[\phi] = \alpha$  かつ  $E_{\theta_0}[\phi T] = \alpha E_{\theta_0}[T]$  である (命題 1.10 (1) より  $\phi T$  と  $T$  が  $P_{\theta_0}$ -可積分であることに注意する).

(ii) ある  $t_0, t_1 \in \mathbb{R}$ ,  $t_0 \leq t_1$  が存在して,

$$\phi(x) = \begin{cases} 0 & (t_0 < T(x) < t_1) \\ 1 & (T(x) < t_0 \text{ または } T(x) > t_1) \end{cases} \quad (\mu\text{-a.e. } x \in \mathcal{X})$$

が成り立つ.

(2)  $\alpha \in (0, 1]$  であるとする. このとき, (1) の条件を満たす検定  $\phi$  は, 必ず存在する.

**証明** (1) 検定  $\phi$  が主張の条件を満たすとして, 条件 (ii) における  $t_0, t_1 \in \mathbb{R}$  をとる.  $\theta \in \Theta \setminus \{\theta_0\}$  を任意にとる. これに対して,  $c_0, c_1 \in \mathbb{R}$  を適当にとれば,

$$\begin{cases} e^{(\theta-\theta_0)t} < c_0 + c_1 t & (t_0 < t < t_1) \\ e^{(\theta-\theta_0)t} > c_0 + c_1 t & (t < t_0 \text{ または } t > t_1) \end{cases}$$

となる. このとき,

$$\phi(x) = \begin{cases} 0 & (e^{(\theta-\theta_0)T(x)} < c_0 + c_1 T(x)) \\ 1 & (e^{(\theta-\theta_0)T(x)} > c_0 + c_1 T(x)) \end{cases} \quad (\mu\text{-a.e. } x \in \mathcal{X})$$

だから、一般化された Neyman–Pearson の補題（補題 3.5 (1)）より、

$$\Phi_\alpha = \left\{ \phi' : \mathcal{X} \rightarrow [0, 1] \mid \phi' \text{ は可測, } E_{\theta_0}[\phi'] = \int_{\mathcal{X}} \phi' dP_{\theta_0} = \alpha, E_{\theta_0}[\phi' T] = \int_{\mathcal{X}} \phi' T dP_{\theta_0} = \alpha E_{\theta_0}[T] \right\}$$

と置けば、 $\phi' \in \Phi_\alpha$  に対する値

$$E_\theta[\phi'] = \int_{\mathcal{X}} \phi' dP_\theta = e^{b(\theta_0)-b(\theta)} \int_{\mathcal{X}} \phi' \exp((\theta - \theta_0)T) dP_{\theta_0}$$

は  $\phi' = \phi$  のときに最大値をとる。特に、 $(\{\theta_0\}, \Theta \setminus \{\theta_0\})$  に対する任意の有意水準  $\alpha$  の不偏検定  $\phi'$  について、補題 3.14 (1) より  $\phi' \in \Phi_\alpha$  だから、 $E_\theta[\phi] \geq E_\theta[\phi']$  である。これが任意の  $\theta \in \Theta \setminus \{\theta_0\}$  に対して成り立つから、 $\phi$  は  $(\{\theta_0\}, \Theta \setminus \{\theta_0\})$  に対する有意水準  $\alpha$  の一様最強力不偏検定である。

(2)  $P = T_* P_{\theta_0}$  と  $f(t) = t$  ( $t \in \mathbb{R}$ ) に対して補題 3.15 を適用して条件を満たす可測関数  $\chi : \mathbb{R} \rightarrow [0, 1]$  をとり、 $\phi = \chi \circ T$  と置けばよい。□

**定理 3.17**  $\mathcal{X}$  を可測空間とする。  $\Theta$  を  $\mathbb{R}$  の部分集合とし、  $\mathcal{X}$  上の測度  $\mu$ 、可測関数  $g : \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$  と  $T : \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}$ 、関数  $b : \Theta \rightarrow \mathbb{R}$  を用いて

$$P_\theta = f_\theta \cdot \mu, \quad f_\theta(x) = g(x) \exp(\theta T(x) - b(\theta))$$

と表せる自然パラメータの指数型分布族  $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$  を考える。  $\theta_0, \theta_1 \in \text{int}_{\mathbb{R}}(\Theta)$ 、 $\theta_0 < \theta_1$  とし、 $\alpha \in [0, 1]$  とする。

(1) 次の条件を満たす検定  $\phi : \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$  は、 $(\Theta \cap [\theta_0, \theta_1], \Theta \setminus [\theta_0, \theta_1])$  に対する有意水準  $\alpha$  の一様最強力不偏検定である。

- (i)  $E_{\theta_0}[\phi] = E_{\theta_1}[\phi] = \alpha$  である。
- (ii) ある  $t_0, t_1 \in \mathbb{R}$ 、 $t_0 \leq t_1$  が存在して、

$$\phi(x) = \begin{cases} 0 & (t_0 < T(x) < t_1) \\ 1 & (T(x) < t_0 \text{ または } T(x) > t_1) \end{cases} \quad (\mu\text{-a.e. } x \in \mathcal{X})$$

が成り立つ。

(2)  $\alpha \in (0, 1]$  であるとする。このとき、(1) の条件を満たす検定  $\phi$  は、必ず存在する。

**証明** (1) 検定  $\phi$  が主張の条件を満たすとして、条件 (ii) における  $t_0, t_1 \in \mathbb{R}$  をとる。  $\theta \in \Theta \setminus [\theta_0, \theta_1]$  を任意にとる。これに対して、 $c_0, c_1 \in \mathbb{R}$  を適当にとれば、

$$\begin{cases} e^{(\theta-\theta_0)t} < c_0 + c_1 e^{(\theta_1-\theta_0)t} & (t_0 < t < t_1) \\ e^{(\theta-\theta_0)t} > c_0 + c_1 e^{(\theta_1-\theta_0)t} & (t < t_0 \text{ または } t > t_1) \end{cases}$$

となる。このとき、

$$\phi(x) = \begin{cases} 0 & (e^{(\theta-\theta_0)T(x)} < c_0 + c_1 e^{(\theta_1-\theta_0)T(x)}) \\ 1 & (e^{(\theta-\theta_0)T(x)} > c_0 + c_1 e^{(\theta_1-\theta_0)T(x)}) \end{cases} \quad (\mu\text{-a.e. } x \in \mathcal{X})$$

だから、一般化された Neyman–Pearson の補題（補題 3.5 (1)）より、

$$\Phi_\alpha = \left\{ \phi' : \mathcal{X} \rightarrow [0, 1] \mid \phi' \text{ は可測, } E_{\theta_0}[\phi'] = \int_{\mathcal{X}} \phi' dP_{\theta_0} = \alpha, E_{\theta_1}[\phi'] = e^{b(\theta_0)-b(\theta_1)} \int_{\mathcal{X}} \phi' \exp((\theta_1 - \theta_0)T) dP_{\theta_0} = \alpha \right\}$$

と置けば、 $\phi' \in \Phi_\alpha$  に対する値

$$E_\theta[\phi'] = \int_{\mathcal{X}} \phi' dP_\theta = e^{b(\theta_0)-b(\theta)} \int_{\mathcal{X}} \phi' \exp((\theta - \theta_0)T) dP_{\theta_0}$$

は  $\phi' = \phi$  のときに最大値をとる．特に、 $(\Theta \cap [\theta_0, \theta_1], \Theta \setminus [\theta_0, \theta_1])$  に対する任意の有意水準  $\alpha$  の不偏検定  $\phi'$  について、補題 3.14 (2) より  $\phi' \in \Phi_\alpha$  だから、 $E_\theta[\phi] \geq E_\theta[\phi']$  である．これが任意の  $\theta \in \Theta \setminus [\theta_0, \theta_1]$  に対して成り立つから、 $\phi$  は  $(\Theta \cap [\theta_0, \theta_1], \Theta \setminus [\theta_0, \theta_1])$  に対する有意水準  $\alpha$  の一様最強力不偏検定である．

(2)  $P = T_*P_{\theta_0}$  と  $f(t) = e^{(\theta_1 - \theta_0)t}$  ( $t \in \mathbb{R}$ ) に対して補題 3.15 を適用して条件を満たす可測関数  $\chi: \mathbb{R} \rightarrow [0, 1]$  をとり、 $\phi = \chi \circ T$  と置けばよい．  $\square$

**注意 3.18** パラメータ空間の次元が 2 以上の指数型分布族についても、一様最強力不偏検定の存在に関して、定理 3.16 や定理 3.17 と同様な定理が成り立つ．詳しくは、吉田 [2, 定理 3.33] を参照のこと．

## 参考文献

- [1] 野田一雄，宮岡悦良，『入門・演習 数理統計』，共立出版，1990．
- [2] 吉田朋広，『数理統計学』，朝倉書店，2006．